

“アダプテッド”定着研修会 マニュアル試案

第1弾：カリキュラムと研修会資料

アダプテッド定着プロジェクト監修

本マニュアルは、障害のある子どもがいる体育授業やスポーツ指導を担当している先生や指導者に、“アダプテッド”の視点や技術を知って活用していただくための研修会を行う主催者に向けて作成されたものです。

第1弾では、カリキュラムと研修会資料を示し、研修会を行う主催者の参考資料にしていただければと思います。

Version1.0

第1章 本マニュアルの使用条件

以下のQに答える形で実施できるかご確認ください。

Q1 今回の研修会の主催者ですか？

→主催者であれば、このマニュアルを活用することはできます。

→主催者でない場合、以下のQ2をご覧ください。

Q2 主催者の研修会目的・テーマと、本研修会の内容は合致していますか？ もしくは調整することは可能ですか？

→合致していたり、調整可能であれば、このマニュアルを活用することはできます。

→そうでなければ、このマニュアルを活用することは難しいです。

Q3 場所は決まっていますか？

→場所は対面であることが望ましいですが、オンラインでも実施可能です。今回は対面形式を想定したものを提示しています。第2弾以降でオンラインなどの例を含める計画です。

Q4 時間は決まっていますか？

→これまでの実績から、12 時時間、6 時間、3 時間、90 分で実施することができます。今回は6 時間ものを想定したものを提示しています。後半に、変更例を示しておきますので参照してください。

第2章 本マニュアルの内容

1. コア・カリキュラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2. コア・カリキュラムを想定した講義例・・・・・・・・ 5
3. コア・カリキュラムを想定した演習例・・・・・・・・ 16
4. 時間別カリキュラム例・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

1. コア・カリキュラム

2019年にアダプテッド定着プロジェクトによって開発された、アダプテッドを定着するための研修会のコア・カリキュラムである。当時は、現場の体育授業を担当している学校の教員を対象にアダプテッドの定着を図ることを目的とした。そのため、当時実施されていた教員免許状更新講習会をターゲットにカリキュラムを作成した。この更新講習会の時間設定が6時間であったため、6時間で構想したものである。

カリキュラム内容	具体的内容等
(1) アダプテッドの理論的位 置づけ（講義） 60分	目的： <u>なぜアダプテッドが必要なのかを、現状、 人権、障害特性、当事者観、科学的方法論などか ら理解を深めるようにする</u>
(2) 障害児体育の実態の理解 （講義） 60分×2 障害種、もしくは は1 障害種+「自分たち の実践の振り返り」	■項目) (1) ・障害児体育の現状と課題 ・アダプテッドの必要性と定義 ・インクルーシブ体育の推進のための意義 (2) ・体育場面における障害児の困難さ ・さまざまな障害の特性 ・障害に応じた指導の方法論 ■具体的内容例) ・スポーツをすることは人権 ・障害のある人のためのインクルーシブ教育 ・障害のある子どもたちの声 ・インクルーシブな体育を実現するには ・アダプテッドとは？アダプテッドの理論 ・アダプテッドと合理的配慮
(3) アダプテッドに特化した 演習（演習） 90分	目的： <u>障害のある人が活動に参加するためのアダプ テッドの工夫を実践形式で演習する</u> ■演習例) 時間に応じて以下の内容を組み込む、以

	<p>下の内容を参考に独自に内容を作成する。可能な限り2障害種をとりあげる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車いすの人がバレーボールを楽しむには？ ・知的障害のある子どもへの発達段階に応じた指導とは？ など <p>※以下の教材コンテンツを活用して演習する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイドブック（後ほど紹介）をもとにグループでディスカッションを行う ・ホームページ（後ほど紹介）の教材を実際に行い、さらに自分たちで発展的な内容を考える
<p>(4) インクルーシブに特化した演習（演習）90分</p>	<p>目的：活動するうえでの「違い」を前提とした活動内容の工夫</p> <p>■演習例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おにごっこなどの遊びを障害のある子どもも一緒に楽しむには？ ・各種スポーツ（自分の専門種目）を「違い」を前提として楽しむには？ <p>※以下の教材コンテンツを活用して演習する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイドブック（後ほど紹介）のなかにある内容をもとにグループでディスカッションを行う ・ホームページ（後ほど紹介）の教材を使って実際に行い、さらに自分たちで発展的な内容を考える

2. コア・カリキュラムを想定した講義例

(1) アダプテッドの理論的位置づけ(講義)および(2)障害児体育の実態の理解(講義)に使用するスライドとメモ資料を転記する。スライドは、以下のアダプテッド定着プロジェクトHPに公開する予定である。

ガイドブック、これまでの報告書、スライド資料等は、アダプテッド定着プロジェクトのウェブページをご覧ください。

<https://adaptedproject.jimdofree.com>

ホーム アダプテッドって何? 明日の体育で何をしよう?

障害のある子どもについて アダプテッド定着プロジェクトとは

Challenge
アダプテッド
<https://adaptedproject.jimdofree.com>

“アダプテッド”
定着プロジェクト

~障害児のいる
体育をゆたかに~

2. 障がいのある人のためのインクルーシブ教

- 障がいのある者が一般的な教育制度から排除されない
- 必要な教育環境が整備される
- 個々に必要となる適宜な変更・調整（合理的配慮）が提供される

特別支援学級在籍者数は毎年平均7.6%増加

多様な「体育」の実践 → インクルーシブ体育

障がいのある児童生徒が「体育」を受ける授業形態はさまざま



近年、日本においてダイバーシティ社会が急速に進み、そこでは人々の「共生」の心の育成が大きな課題となっている。ここでの「共生」の心とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し合い、人々の多様な在り方を互いに認め合える全員参加型の社会を志向する意識・態度・行動をさしている。ダイバーシティとは、従来のスタンダードにとらわれず、多様な属性や価値、発想を取り入れることであり、先行研究によると「多様性」と訳されることが多い。薄江は、インクルーシブとは、「何らかの不合理な理由で社会で排除されていた人を包摂すること、もしくは包摂された状態」と定義づけている。ここでのインクルーシブは、ダイバーシティを前提としており、インクルーシブする対象は障がい者だけではなく、性別、国籍、民族などの多様な個性や背景を持つ人々を積極的に採用し、組織の中にさまざまな人が存在している状態をダイバーシティ、互いに個性を認め、受容し、一体となって動くことをインクルージョンとしており、最終的にはこの人々が「いて当たり前だと思える」環境や価値観をつくること为目标である。

3. 障害のある子どもたちの声

- ・体育は「見学するもの」？
- ・僕が入ると嫌な顔をされる
- ・いつも「下手」と言われる
- ・インクルーシブ体育は「理想」
- ・できれば参加したくない
- ・迷惑をかけたくない
- ・放っておいて欲しい



残念ながら、障害のある児童生徒が体育の授業で経験していることは、障害者権利条約やインクルーシブ教育が目指していることと異なっている現実もあります。いつも見学していたり、チームスポーツに参加できなかったり、参加しづらかったり、体育が嫌になったりしていることも少なくありません。このような現状を改善するためには、スポーツの捉え方、評価や価値が、勝利至上主義や能力主義に偏らないようにすること、教員と障害のある児童生徒、障害のある児童生徒とない児童生徒の、相互の理解を促すことが大切です。

4. インクルーシブ体育を実践するために

多様な価値の理解と共有（多様性：Diversity）と一緒に授業を行う状態（包摂：Inclusion）をつないでいかなければならない。その両者をつなぐ観念や技術のひとつがアダプテッドである。



インクルーシブ体育を実践するためには、多様な価値の理解と共有と一緒に授業を行う状態をつなぐことが必要です。その多様性、ダイバーシティと、包摂、インクルージョンをつなぐ観念や技術のひとつがアダプテッド、工夫する、ということです。指導者のちょっとした意識の変化と工夫が、誰もがスポーツを楽しめるインクルーシブ体育の実現につながります。アダプテッド定着プロジェクトのホームページでは、障害の特徴や障目に合わせた工夫の例も紹介しています。ぜひご参照ください。

5. アダプテッドとは？

英語の「adapt」= 適合させる、適応させる

adaptの形容詞 → 「adapted」

「～に適合（適応）した・させ」

例えば・・・「アダプター」は、異なる種類の機器を適合して、使えるようにするための装置

「アダプター」は、英語の「adapt」です。adaptは「動物の身体は、環境に適合する」という意味があります。adaptedは、調整、～に適合した、という意味です。



アダプテッドは、英語のアダプトの形容詞、アダプテッドです。英語のアダプテッドは、何かに適合した、させたという意味です。例えば、みなさんもよくご存じのアダプターは、異なる種類の機器を適合して使用できるようにするための装置ですね。

5. アダプテッドとは？

では、「アダプテッド・スポーツ」と

適合したスポーツ？

Adapted Sportをそのまま訳すと、適合したスポーツ。
何に適合したスポーツ？

略称 ⇒ アダプテッド・フィジカル・アクティビティ (adapted physical activity)

適応させた身体活動 ⇒ する人に合わせたスポーツ

スポーツを、個人個人の何らかの特別なニーズに合わせて、ルールや用具を修正したり、変更したり、追加した「その人に合ったスポーツ」。

では、アダプテッド・スポーツとはどう言う意味でしょうか。
直訳すると、適応した、適合させたスポーツとなりますが、何と何を適応させるということでしょうか。
アダプテッド・スポーツの語源は、アダプテッド フィジカル アクティビティ です。
直訳すると、適応させられた身体活動となり、少し理解が難しいですね。
そこで、ルールや用具、活動の方法を個人の状況に応じて作り変えていくことで、だれでもスポーツに参加できるという意味に合わせた日本語表記としてアダプテッド・スポーツを用いることになりました。
人に合わせたスポーツということですね。

8

5. アダプテッドとは？

「する人に適合（適応）したスポーツ」の意

スポーツを、個人個人の何らかの特別なニーズに合わせて、ルールや用具を、修正したり変更したり、追加したりすること



（東京2020年夏季パラリンピック）「パラリンピック」

9

6. アダプテッドの理論

「**アダプテッド**は「障害のある人の特性に合わせて」と学んだから、知的障害と自閉症がある生徒に対して、ボール運動の単元で意識して取り組んだけれど、指導にならなくなった。



アダプテッドはその人に合わせる事が特徴であることを説明しました。しかし、すべてのことを本人に合わせていることが望ましいというわけではありません。
スライドのような事例は、障害のある生徒の特性に合わせて、アダプテッドしているように思えますが、よりよいアダプテッドにするための改善点があるようです。

本人が投げられる実力に合わせて、的の距離を設定したり、投げるフォームも本人が投げやすいフォームのまま、特に指導していない。ボールの色にこだわりの持ったので、その色のボールだけで投げてもらったら回数が減り、そのうちボール投げに興味がなくなりました。

10

6. アダプテッドの理論

エコロジカルモデル



アダプテッドするときに考える3つの要素があります。
ひとつは、個人の特性や特徴です。個人のできる動きややりやすい方法に合わせて、ルールや用具、方法を工夫することです。
先ほどの事例だと、生徒が長く距離を置いたり、投げやすいフォームで投げてもらったり、好きな色のボールを使ってもらったりということが当てはまります。
もちろん、これらの工夫でも、生徒は的にボールが当たられることで達成感が得られたり、好きなボールを使うことがボールを投げる動機づけにつながりやすいでしょう。
ただ、ここでアダプテッドは終わりではありません。
ふたつ目の要素は課題です。
個人の特徴に合わせて、活動の内容や目標、目的をアダプテッドしているか、です。
ボール投げの目標を「その生徒が投げられる距離」でとどめるのではなく、「投げられる距離を伸ばす」ことに着目すれば、さらなるアダプテッドが実践できます。
そして3つ目の要素は、その課題を遂行するための環境を考えることです。
例えば、指導者からの「今日は前回よりも遠くまで投げられたね！」という言葉かけが生徒の達成感やモチベーションにつながり、できた！もっとやっ

11

てみたい！につながります。
 用具も調整づくりのひとつです。
 ボール投げに興味なくなったのはボールの色が原因でしょうか？
 狙う的に工夫はあったのでしょうか？
 「何も指導しない」ことはアダプテッドではありません。
 個人の特性だけでなく、活動の目標や目的が適切にアダプテッドされているか、その目標や目的を達成するために必要な環境調整をし、個人のできる！
 できた！もっとやってみたい！を引き出しているかを吟味しながら、トライ
 アル&エラーで、環境応変に対応することが大切です。



7. アダプテッドと合理的配慮

合理的配慮とは・・・

障害のある人が障害のない人と平等に人権を享受し、行儀できるよう、一人ひとりの特徴や場面に応じて発生する損失された部分を補い、困っている部分を取り除くための、個別の調整や変更のこと



アダプテッドは、合理的配慮の一部
 失われた部分を補入することで、本人や活動そのものの可能性を引き出すことを大切にします



8. アダプテッドのすすめ方

3ステップ+1 でアダプテッドをすすめよう！



この動画では、アダプテッドをすすめるスリーステップとプラスワンをご紹介します。

8. アダプテッドのすすめ方

ステップ1 こんな子いませんか？
 体育授業の参加で困っている子どもの存在を把握する

※おそれや不安が
 理解できていない

※友だちと一緒に
 楽しむことが難しい

※ボールを
 握っている

※見る、聞くことに
 困難がある

※声いじりを使っているため、身振りに誤解がある
 など

ステップ1は、気づきです。
 アダプテッドは、アダプテッドを必要としている子どもの存在に気付くことから始まります。
 体育の授業に参加している児童生徒の中に、指示通りに動いていなかったり、いつも一人だったり、ボールを怖がっていたり、視覚や聴覚に困難さがあったり、車いすを使用しているために動きに制約があったりする子どもがいるかどうか、授業前や授業中、授業後に、見て、聴いて、把握しましょう。
 体育の授業以外での気づきも、体育につながります。

8. アダプテッドのすすめ方

ステップ2 バリアはなに？
 困っている背景にあるバリアを見つける

「もの」バリア → 道具や環境が使いにくい？
 「人」バリア → 友だちとのコミュニケーション？
 支援員や協力教員がいない？
 指導者間の連携？
 「ルール」バリア → 課題や指示がわからない？
 難しすぎる？ 難解すぎる？

困っている子どもがいることがわかったら、その子どもが困っている背景にあるバリアを見つけましょう。
 バリアにはいろいろあると思いますが、ここでは大きく3つの分けて考えます。
 ひとつ目は、もののバリアです。
 授業で使う道具や授業環境が、障害のある子どもにとって使いにくかったり、アクセスしにくかったりするようなことです。
 例えば、不審用がある子どもは、通常の大きさのサッカーボールを蹴ることが困難な場合があります。
 2つ目は人のバリアです。
 友だちとうまくコミュニケーションがとれなかったり、支援員や学習ボランティア、協力教員が配置できなかったり、指導者間の連携がとれていなかったりすると、その子どもは必要な情報や支援を得ることができません。
 例えば、視覚障害のある子どもは、その場で起こっていることや、進行している内容がわからず、退席してしまいます。
 3つ目は、ルールのバリアです。
 授業の中で達成しなければならない課題や、守らなければならない指示、試合のルールなどがわからなかったり、課題のレベルが適切でなかったりすることです。

例えば、発達障害があると、言葉だけでは課題が理解しづらいことがあります。

8. アダプテッドのすすめ方

ステップ3 アダプテッドのポイントを考える
 バリアを軽減するための、変更・修正・追加・低減

「もの」バリア → 使いやすい道具を用意する
 「人」バリア → 障害についてクラスで学び合う
 支援できる人を配置する
 友だちからの声かけ
 「ルール」バリア → わかる方法で課題を示す
 ルールを変更する

ステップ3は、ステップ2のバリアをふまえてアダプテッドを考えます。
 バリアがわかれば、そのバリアを軽減したり、なくすために、変更したり、修正したり、追加したり、減らしたりします。
 たとえば、もののバリアがあれば、その子どもが使いやすい道具を用意することができます。
 サッカーボールを蹴ることが困難であれば、大きなバランスボールを使ってみることができます。
 人のバリアがあれば、その子どもの障害についてクラスで学び合い、クラスメートの支援を得られるようにしたり、支援員や学習ボランティア、協力教員を配置したりします。
 視覚障害がある子どもに、ゲームの進行状況や動きなどを実況中継してもらおうことで、一緒にその瞬間を楽しむことができます。
 そして、ルールのバリアがある場合は、その子どもがわかる方法で説明したり、ルールを変更したり、追加したり、減らしたりすることができます。
 知的障害がある場合は、口頭での説明だけではなく、視覚的に情報が得られるように、絵カードや見本で、ルールや課題を示すことができます。

8. アダプテッドのすすめ方

アダプテッド

何を変更したり、修正したり、加えたり、減らしたらいいの？
アダプテッドしたけど、うまくいかない…。



アダプテッドを考える時、何を変更したり、修正したり、加えたり、減らしたりしたらいいのかわからず、迷ったり、アダプテッドしたことがうまくいかなくて困ることがあるかもしれません。そのような時は、実施している運動やスポーツ種目について、用具、集団・仲間、フィールド、システムの前にはアダプテッドを考えてみてください。例えば、バスケットボールであれば、障害の程度を考慮してチーム編成をするクワシテーションはルールの変更でもありますが、ゴールで得られる得点をレベル別で変えてみたり、上手い生徒だけが一つのグループに入らないように工夫したりします。また、ボールの大きさや材質を変更してみたり、コートを小さくしたり、分割して使ってみたりすることもできます。ルールの変更も、人数を減らしたり、増やしたり、リングに当たったら1点にしてみたり、バスケットはできないルールにするなども可能です。アダプテッドは最小限にすることが好ましいですが、場合によって、その子どもだけの特別ルールや個別の対応、例えばその子どもはダブルドリブルがOKや、別メニューでスキルを少しづつ練習するなどアダプテッドとなります。

8. アダプテッドのすすめ方

+1 あきらめない

子どもが運動やスポーツを「やりたい」と思っているのに、どんなに練習しても通常の方法ではできない状況がある時に、アダプテッドが必要。

その子どもがあらめれる前に、指導者があきらめない。



一人ひとりの特徴は異なるため、アダプテッドの方法は無限大です。また、すぐに正解が見つかるものでもありません。トライアル&エラーで、1つのアダプテッドがうまくいかなくても、別のアダプテッドの方法を考えてみます。障害のある子どもが、ひとつのスキルを習得するためには時間が必要です。どこかで最終的にあきらめなければならないレベルやタイミングがあることも事実です。しかし、その場合でも、別の方法で運動やスポーツを楽しむことができる道を用意しておくこともアダプテッドです。みるスポーツ、まさえるスポーツも、スポーツの楽しみ方です。小さな達成を褒め、励まし、「やりたい」「できた」を増やすアダプテッドを、指導者があきらめずに行なうようにしましょう。

9. 体育科の授業づくり



9. 体育科の授業づくり

第1学年及び第2学年の目標及び内容 p22

- (1) 簡単なまきりや活動を通して各種の運動を楽しくできるようにするとともに、その基本的な動きを身に付け、力を養う。
- (2) だれとでも仲よくし、健康・安全に留意して意欲的に運動をする態度を育てる。

「簡単なまきりや活動を工夫して」は、運動の思考・判断に係る内容を低学年の児童の発達の段階に応じて示したものであり、各種の運動を楽しむための活動の仕方や競争のルールなどを児童の力に応じて工夫することを表している。

※学習指導要領解説にも記載されている

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成27年告示) 別添
指導要領2

第3学年及び第4学年の目標及び内容 P37

(1) 活動を通して各様の運動を楽しむことができるようにするとともに、その基本的な動きや技能を身に付け、体力を養う。
(2) 筋力、柔軟性などの発達を促すとともに、健康・安全に留意し、最後まで努力して課題をこなす態度を育てる。
(3) 健康な生活及び体の発育・発達について理解できるようにし、身近な生活において健康で安全な生活を楽しむ態度を育てる。

「活動を工夫して」とは、運動の楽しさに触れたり、動きや技能を身に付けたり体力を養ったりすることに向けての動き方や運動する場、練習の仕方などを工夫することを示したものである。

※学習指導要領解説にも記載されている

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成27年告示) 別添
指導要領2

第3学年及び第4学年 球技：ゴール型 P49-50

(1) 次の運動を楽しむ行い、その動きができるようになる。
ア ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって、楽しいゲームをすること。
イ ネット型ゲームでは、ボールを蹴ったり、ボールをつないで打ったりして楽しいゲームをすること。
ウ バスボール型ゲームでは、蹴る、打つ、捕る、投げるなどの動きによって、楽しいゲームをすること。

「楽しいゲーム」とは、簡単なボール操作で行える、比較的少人数で行える、身体接触を避けるなど、児童が取り組みやすいように工夫したゲームをいう。

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成27年告示) 別添
指導要領2

ア ゴール型ゲーム

(7) コート内で攻守入り交じってボールを手や足で操作したり、空いている場所に素早く動いたりしてゲームをする。
(4) ゴールにシュートをしたり、障壁を取り合って得点ゾーンに走り込んだりするゲームをする。

【例示】

- ハンドボール、ポートボールなどを基にした楽しいゲーム (手を使ったゴール型ゲーム)
- ラインサッカー、ミニサッカーなどを基にした楽しいゲーム (足を使ったゴール型ゲーム)
- タグラグビーやフラッグフットボールなどを基にした楽しいゲーム (障壁を取り合うゴール型ゲーム)

・ボールを持ったときにゴールに押をつけること。
・味方にボールを渡したり、パスを出したりすること。
・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動すること。

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成27年告示) 別添
指導要領2

イ ネット型ゲーム

(7) ごく軽量のボールを片手や両手ではじいて自陣の味方にパスをしたり相手コートに送ったりして、ラリーの続くゲームをする。また、弾むボールを床や地面に打ちつけて相手コートに返し、ラリーの続くゲームをする。
(4) 自陣から相手コートに向かって、相手が捕りにくいようなボールを返すゲームをする。

【例示】

- ソフトバレーボールを基にした楽しいゲーム
- プレールボールを基にした楽しいゲーム

プレールボールは、自陣の床にこし又は前腕を用いてボールを打ちつけ、味方にパスをしたり、自陣のコートにボールを打ちつけて高いネットを越し、相手のコートにボールを送ったりするゲームである。中学年では、相手打ちや両手打ちを許容し、チームの人数、ネットの高さ、コートの大きさなどを工夫することで楽しいゲームをする。

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成21年告示) 編
指導要領27

ウ ベースボール型ゲーム

- (7) ボールを蹴る、打つなどにより攻撃をしたり、捕る、投げるなどにより守備をしたりして、攻守を交代するゲームをする。
(4) 全力で走塁し、得点がとれるようなゲームをする。

【例示】

- 攻撃側がボールを蹴って行うゲーム
○ 手やラケットなどでボールを打ったり、止まったボールを打ったりして行うゲーム



9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成21年告示) 編
指導要領27

第5学年及び第6学年 E ボール運動 P70-71

(1) 技能

- (1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。
ア ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを打

「簡易化されたゲーム」とは、ルールや形式が一般化されたゲームを児童の発達の段階を踏まえ、プレーヤーの数、コート of 広さ（奥行きや横幅）、プレー上の制限（緩和）、ボールその他の運動用具や設備など、ゲームのルールや様式を修正し、学習課題を追求しやすくするように工夫したゲームをいう。

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成21年告示) 編
指導要領27

第5学年及び第6学年 E ボール運動 P70-71

(3) 思考・判断

- (3) 規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を立てたりすることができるようにする。

ア ゴール型ゲームやネット型ゲーム、ベースボール型ゲームの行い方を知り、楽しくゲームを行うことができるプレーヤーの数やコートのつくり、プレー上の制限、得点の仕方、ゲームや練習をするときの規則などを選ぶこと。

9. 体育科の授業づくり 小学校体育科指導要領(平成21年告示) 編
指導要領27

第5学年及び第6学年 E ボール運動 P70-71

(3) 思考・判断

- (3) 規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を立てたりすることができるようにする。

指導に際しては、…

プレーヤーの数 (人 の条件)
コートのつくり (場 の条件)
用具 (モノ の条件)
プレイ上の制限 (ルールの条件)

を工夫したゲームを取り入れ、…

9. 体育科の授業づくり



以下、資料として実践報告を掲載する。

※最新版が手に入るかも



※最新版が手に入るかも



10. アダプテッド体育



Q. どのような工夫をしますか？

- 「もの」の工夫
- 「ルール」の工夫
- 「人」の工夫

10. アダプテッド体育



授業の主なしかけ

<p>「もの」の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> - パイク型のボールも使用する。 - ゴールを広くする。 	<p>「ルール」の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> - 攻撃一方通行のルールにする。 - 守備側のゴールにする。
--	---

3. コア・カリキュラムを想定した演習例

(3) アダプテッドに特化した演習および(4) インクルーシブに特化した演習に関する資料を示す。

定着研修会の実施における確認事項

- 「アダプテッドの理論的位置づけ」や「障害児の体育の意義(「アダプテッド」と「インクルーシブ」の関係性)」は研修の一部に必ず入れる
- アダプテッド演習については、障害種や扱う運動課題などを具体的に設定し、主に個にアダプテッドする方法を考
→ その際、アダプテッドは「試行錯誤、トライ&エラーの連続」であることを強調し、例えば3段階(自分で考える→グループで考える(やってみる)→他のグループの考えをもとにさらに再考する)を設定できるとよい
- インクルーシブ演習については、例えば「自分が担当している通常級で、支援級の子どもも含めたインクルーシブな体育授業を行う場合にどうするか」のような具体的な場面の解決につながる内容にすると入りやすいのではない
→ その際、アダプテッド演習と同様に、「試行錯誤、トライ&エラーの連続」であることが伝わるように段階的に設定できるとよい

本プロジェクトでこれまで実施した、ボッチャ(ターゲット型)、バレーボール(ネット型)、サッカー(ゴール型)を例に簡単な手続きを紹介していく

1. ボッチャ(ターゲット型)を題材とした例

例1) 視覚障害のある人を想定した例

- ・ボッチャを体験し、面白さや醍醐味を確認する
- ・視覚障害のある人がボッチャを行うことを想定し、視覚障害の体験を試みる
- ・視覚障害のある人がボッチャを楽しめるようにアダプテッドしてみる
- ・視覚障害のある人も一緒にボッチャを楽しめるようにアダプテッドしてみる

例2) 様々な障害のある人を想定した例 <添付の資料 A>

- ・自由にボッチャを楽しむ
- ・対戦を変えて、戦略などを話し合う(コミュニケーション・戦略)
- ・肢体不自由児の場合について考える(非利き手、足、ランプ使用での対戦)
- ・視覚障害の場合(グループで2名アイマスクで実践)
- ・発達障害・知的障害の場合(ルールをアダプテッドする)

2. バレーボール(ネット型)を題材とした例

例1) 円陣パスをみんなで行うために <添付の資料 B>

【演習①】「障害のある子どもがやってくる」

各グループに何らかの障害のある子どもがやってくる

→ 個人およびグループメンバーで、どうやったら一緒にできそうかを考える段階

【演習②】「一緒にやってみる」

障害のある子ども(の役の人)がグループにやってきて一緒に活動する

→ 障害のある子ども(の役の人)を目の前にして、まずは実際にやってみる段階

【演習③】「試行錯誤してみる」 自分達で考えたことに加え他のグループの様子も

参考にし、試行錯誤する

→ 様々なアイデアを共有しながら工夫を繰り返す段階

<支援が必要な子どもの例>

・「体に麻痺があり歩行器で参加し、かつ、視覚認知が弱い。さらに、過去にボール遊びで大けがをした経験があり著しい恐怖心がある」など

・伝わりやすい障害、伝わりにくい障害、それらを踏まえた子どもの気持ち、という視点

例2) ハンドリー、シッティングバレーを題材

■ ハンドリー(ボール運動:ネット型ゲーム)の実践

課題:ルールを工夫して楽しい「接戦のゲーム」をつくる.

条件:バドミントンのハーフコート

ネットの高さ…コーンの高さ

ボール…ソフトバレーボール

プレーヤー…2対2

工夫:場を工夫する(例 ネットの位置を変える)

人を工夫する(例 手をつないで一体でプレー)

操作を工夫する(例 利き手でない手で操作)

* 状況に応じて、「接戦のゲーム」になるように、相互に合意ながらルールを工夫していく

■ シットイングバレーボールの実践

* 上述の課題「接戦のゲーム」をつくるはそのままにシットイングバレーを教材化して、「みんながたのしい、みんなでたのしい」ゲームをつくる

例3) 授業づくりに取り組む例

- ① 1班6～7人(10班編成)
- ② 各班で1～7番を決める
- ③ T1、T2の指名と支援が必要な生徒の指名をする
→ 例「奇数班1番がT1、偶数班1番がT2。偶数、奇数班2番が支援が必要な生徒です。」
- ④ 設定を生徒役に伝える。具体的に示す。
- ⑤ 設定をもとにT1、T2の教員が二人で授業内容を検討する。
- ⑥ 10分の模擬授業を行う。(コート、ネットの再構成、説明含む)
- ⑦ 終了後、担当教諭→生徒役の感想を述べる。

<支援が必要な子どもの例(聴覚障害)>

聞こえにくさがあります。

後ろから声をかけられても分かりません。

運動面での身体的な問題はありません。

話をする時に、母音が中心となる声になります。

声を発することは、あまり好みません。

ジェスチャーや身振り手振りでの表現は多く使います。

運動やスポーツは大好きで積極的に動きます。

<支援が必要な子どもの例(肢体不自由)>

早い動きや立体的な動きが苦手です。

バドミントンやテニスなど、空中を移動する物体を打ち返すことに苦手さがあります。

軽度の脳性麻痺があるため、言葉もゆっくりとした話し方になります。(通常の2～3倍)

力を調節して発揮することが苦手です。

相手の顔を見たり目を合わせるなどは問題ありません。

自分から話したいといつもも思っています。

全体的な動きがゆっくりです。

例4) ハンドサッカーの体験を基にしたネット型球技のアダプテッド

- ・肢体不自由者(車いす等)を想定したアダプテッドの演習。
- ・最初にハンドサッカーを既存のルールで体験し、その後、ネット型球技(バレーボール)を肢体不自由の子どもと一緒に行うにはどうしたらよいかを考える演習。

3. サッカー(ゴール型)を題材とした例

例1) サッカーのミニゲームを題材

【演習①】「障害のある子どもがやってくる」

各グループに何らかの障害のある子どもがやってくる

→ 個人およびグループメンバーで、どうやったら一緒にできそうかを考える段階

【演習②】「一緒にやってみる」

障害のある子ども(の役の人)がグループにやってきて一緒に活動する

→ 障害のある子ども(の役の人)を目の前にして、まずは実際にやってみる段階

【演習③】「試行錯誤してみる」 自分達で考えたことに加え他のグループの様子も参考にし、試行錯誤する

→ 様々なアイデアを共有しながら工夫を繰り返す段階

＜支援が必要な子どもの例＞

- ・「体に麻痺があり歩行器で参加し、かつ、視覚認知が弱い。さらに、過去にボール遊びで大けがをした経験があり著しい恐怖心がある」など
- ・伝わりやすい障害、伝わりにくい障害、それらを踏まえた子どもの気持ち、という視点

例2) ホームページの教材「バランスボールサッカー」を題材

【演習①】 ホームページ教材「バランスボールサッカー」を視聴し、実際にやってみよう

【演習②】 発達障害のある子どもを想定し、バランスボールサッカーをさらにアダプテッドしよう

【演習③】 グループごとに発表し合い、さらに試行錯誤してみよう

資料A: ボッチャ(ターゲット型) 様々な障害のある人を想定した例(活動の流れ)
(準備物) ボッチャ用具、アイマスク、

	活動内容	形態	留意点と台本
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ● 導入、全体説明 ・実技演習を通してアダプテッドを理解する 	全体	<ul style="list-style-type: none"> ● 1グループ6名前後で、グループごとに集まる(はじめての教員同士の場合は、あらかじめ簡単な事項紹介など実施しておく)
活動① 15分	<ul style="list-style-type: none"> ● 各グループでボッチャを行う 	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ● グループごとに、純粋にボッチャを楽しみ、ボッチャの醍醐味やおもしろさを共有 ● 戦略などを話し合う
活動② 30分	<ul style="list-style-type: none"> ● 様々な障害のある人を想定し、アダプテッドを考える各 <p>・肢体不自由児の場合について考える(非利き手、足、ランプ使用での対戦)</p> <p>・視覚障害の場合(グループで2名アイマスクで実践)</p> <p>・発達障害・知的障害の場合(ルールを対象に合わせてアダプテッドする)</p>	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ● ボッチャの魅力を様々な障害のある人がどのように共有できるかを考える ● 各グループで異なる障害を扱ってもよいし、すべての障害を各グループで考えてもよい。時間に応じて。 <p>・肢体不自由の場合は、実際に競技として扱われているランプもあるが、それにこだわらず、身体のどの部位をどのように使えばボールを投げることができるか、ボッチャを楽しめるかを考える。可能であればダンボールなどを準備してその場で教材を作成するのもよい。</p> <p>・視覚障害の場合は、アイマスク等を活用するが、視覚障害に特化してアイマスクをして歩くなどの導入的な課題からはじめ、ボッチャにつなげてよい。視覚障害へのアダプテッドに加え、みんなと一緒にというインクルーシブな視点に発展させられるとよい。</p> <p>・発達障害や知的障害を扱う場合は、課題の理解や見通しといった基本的な環境調整について考えたり、子どもの理解に応じて独自にルールを作ってもよい。</p>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ● まとめ ・前半の講義と合わせ、アダプテッドの実践についてまとめる 	全体	<ul style="list-style-type: none"> ● アダプテッドの方法は試行錯誤していくことが大事であることを伝える

資料B:バレーボール(ネット型) 円陣パスをみんなで行うために(活動の流れ例)
 (準備物) バレーボール各種(ソフトバレーボール、ビーチバレーボール、風船など)
 身近な教材(ビニール袋、新聞紙、スズランテープ、ガムテープ)、文房
 具各種

	活動内容	形態	留意点と台本
導入 5分	●導入、全体説明 ・実技演習を通してアダ プテッドを理解する	全体	● 1グループ6名前後で、グループごとに集 まる(はじめての教員同士の場合は、あら かじめ簡単な事項紹介など実施しておく)
活動① 10分	●各グループでバレー ボールの円陣パスを 行う	グループ	● グループごとに、純粋にバレーボールを楽 しみ、円陣パスの醍醐味やおもしろさを共 有 ● 各種用意したボール(ソフトバレーボール、 ビーチバレーボール、風船など)も試す
活動② 30分	【演習①】「障害のあ る子どもがやってく る」 【演習②】「一緒にや ってみる」 【演習③】「試行錯誤して みる」	グループ	【演習①】では、各グループから1名、障害の ある子ども役の人(Aちゃん)を決め、Aちゃん のみ講師のもとに集まる。Aちゃん役本人の みにどのような特徴があるかを伝え、その役を しながら自分のグループに戻る。この間、各グ ループにはAちゃんの簡単な様子だけ伝え、 自分たちのグループにやってきた時にどうす るかを話し合ってもらう 【演習②】グループメンバーはAちゃんとコミュ ニケーションをとりながら、一緒に円陣パスを 行う方法を模索する。各種準備した教材を活 用する。ある程度案が出てきたら活動を止め、 各グループでどのような活動を考えたかを発 表する 【演習③】各グループの発表を聞いたうえで、 さらに自分たちのグループでどのような活動 ができるかを試行錯誤する
まとめ 5分	●まとめ ・前半の講義と合わせ、 アダプテッドの実践につ いてまとめる	全体	●アダプテッドの方法は試行錯誤していくこと が大事であることを伝える

4. 時間別カリキュラム例

これまでの実績から 12 時間タイプと 3 時間タイプ、1.5 時間タイプのカリキュラム例を示す。これを参考に活用していただければと思う。

(1) 12 時間タイプ例

時間	研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
(1 日目) 9:00-10:00	アダプテッドとは？ 障害児の体育指導の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念
10:00-11:00	肢体不自由のある子どもの体育と インクルージョン	肢体不自由のある子どもの体育と インクルージョン
11:00-12:00	発達障害のある子どもの体育とイン クルージョン	発達障害のある子どもの体育とイン クルージョン
13:00-16:00	肢体不自由のある子ども、発達障害の ある子どもの体育とインクルージョン	アダプテッド演習
(2 日目) 9:00-12:00	障害のある子どもの体育とインク ルージョン	インクルーシブ演習
13:00-16:00	特別支援教育の体育(重度・重複 障害、聴覚障害)	

(2) 3 時間タイプ例

時間	初任者研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
13:00	はじめに	事前アンケート記入
13:10	講義: インクルーシブ体育の意義と理 念	障害児の体育指導の意義と理念 障害のある子どもの体育とインクルー ジョン
14:00	<アリーナへの移動・休憩>	
14:15	演習: アダプテッドおよびインクルーシ ブ体育の実践	アダプテッド演習 インクルーシブ演習
15:30	休憩	事後アンケート記入
15:40	ふりかえり	
15:50	終了	

(3) 1.5 時間タイプ例

時間	校内研修会としての行程	定着研修会としてのカリキュラム
14:20	はじめに アンケート説明	事前アンケート記入
14:30	講義:インクルーシブ体育の意義と理念	障害児の体育指導の意義と理念 インクルーシブ教育とは アダプテッドとは
14:40	インクルーシブな体育実践 【演習①】「障害のある子どもがやってくる」 【演習②】「一緒にやってみる」 【演習③】「試行錯誤してみる」	インクルーシブ演習
15:25	まとめ	事後アンケート記入
15:35	終了	
	個別の質疑応答など	

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、筑波大学が実施した令和5年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツの指導・普及等のためのマニュアル等の作成）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。